

さてそれほどの筆者であるか、どうか、自らを顧て、甚だ赤面の至りである。

さて、恩師の自傳——となると、容易ならざる、心構へが必要である。

今迄私は、小説や雑文は、随分書いた。

四五冊のつまらない單行本も著したが、夫れは事實に拘泥せず、半ば、私の頭で作り上げたものである。

此の書には、さうした、私の我儘や、自由は斷じて許されない。

只々、恩師の踏み越へて來た路に、何んの紛飾も、想像も加へず、書かなければならない。然し、夫れが、單なる報告書でないところに、私の苦心がある。すなわち、事實小説として、書く爲めの、アーテカルな描寫が必要であるからである。

そこで、私は、飽く迄も、冷静に、且つ大膽に、先生が踏んで來られた路を、ありのまま書いた。先生が嘗められた、貧乏や、苦しみや、恥しめなどを偽らず、飾らず、どん／＼容赦なく、筆の先に、ものした。之れはもとより私の藝術的良心からでもあるが、一つには、讀者に何物かを、與へるであろうと、考へたからである。ナポレオンが、生れ乍らにして、佛蘭西皇帝でなかつたやうに、秀吉が初めから、太閤でなかつたやうに、いや、グエーローマンが、赤ん坊の時から、樂聖でなく、ダンテが産聲と共に、詩聖と稱せられなかつたと同じやうに。

中原市五郎先生略年譜

慶應三年 五月十五日、信濃國上伊郡下平村農中
原儀右衛門の三男として生る

明治六年 下平村下等小學校に入學す

明治十年 三月下等小學校卒業、東筑摩郡堅石町
堅石上等小學校に入學す

明治十二年 三月上等小學校卒業、松本市東町戸
田病院に入門、醫學に精進す。

明治十三年 四月戸田病院を辭し、下平村太陽社
の製糸見習となり、十月下平村天龍小學校授業生
となる。

明治十六年 五月上京、印刷工、仕立職見習を経
て授業生となり、神田松下町誠進學會にて、英語
漢文數學を學ぶ。

明治十七年 大藏省銀行事務講習所生となりしも
學資續かず退學して、淺草田邊小學校授業生兼職
後芝風生小學校に轉ず、川崎塾にて、英語、數學
漢文を學ぶ。

明治十八年 一月芝風白金三光町有隣塾に入門。
同塾別科を卒業。

明治十九年 十月福島市の旅館にて、旅の齒科醫
師の弟子となり齒科に志す。

明治二十一年 再上京、齒科醫たらんとし、五月石橋泉の經營する神田錦町東京齒科専門學校に入學す。

明治二十二年 齒科醫術開業試験に及第し、同年五月二十八日齒科醫術開業免狀を下附せらる。同六月麹町十一丁目に齒科醫院開業。

明治二十三年 麹町區飯田町二ノ六七番地に轉店開業す。

明治二十四年 齒科用洗除器を發明專賣特許を得。本邦に於ける特許齒科器械發明の嚆矢なり。

明治二十六年 同志數名と謀り東京齒科醫會を創立し同會幹事となる。

明治二十八年 東京養育院に金員を寄附し、東京府知事より賞狀を受く。

明治三十年 六月、東京府知事より、日清戦役の際軍資の内へ獻金せしに依り褒狀受く。

明治三十一年 四月東京齒科醫會より創立以來の功に依り、金員及謝狀を受く。五月日本赤十字正社員となる。

明治三十三年 十一月三級選出麹町區會議員に當選す、けだし本邦に於ける齒科醫師として區會議員に當選せし最初とす。

明治三十四年 四月學校醫補制を設け麹町小學校兒童口腔診査をなす。本邦に於ける學校齒科施設の最初とす。

明治三十五年 大日本帝國水難救濟會の正社員となる。

明治三十七年 帝國義勇艦隊建設委員となる。麹

町區飯田町衛生組合より、事業補助の故を以て木盃一個を贈與せらる。

明治三十八年 戦役恤兵部へ金壹百圓を寄附せしに付き東京府知事より木盃一個を受く。

明治三十九年 帝國海軍協會總裁より、特別會員に推薦さる。日本齒科教育會を創立齒科醫學校設立を劃す。

明治四十年 五月日本齒科教育會長に推舉され、七月私立共立齒科醫學校を設立す。十一月財團法人同仁會へ寄附せし爲め會長大隅重信より謝狀を受く。十二月齒科新報を創刊し社長となる。

明治四十二年 六月私立共立齒科醫學校を、日本齒科醫學校と改稱、その校長と成る。七月第三回日本醫學會の協議員に推薦せらる。八月、日本齒科醫學専門學校々友會々長となる。

明治四十三年 六月一日日本齒科醫學専門學校指定となる。

明治四十四年 二月日本齒科醫學専門學校長と成る。

大正二年 八月長野縣上伊那郡赤穂尋常高等小學校基本財産に金壹百圓寄附せしに付き長野縣知事より木盃一個下賜せらる。十月東京市長より麹町區會議員在職中小學校建設功勞に對し感謝狀を受く。

大正三年 四月日本齒科學會長と成る。六月大正博覽會に齒科學術及び衛生に關する標本統計を出品、銅賞牌を受く。同月文務省衛生展覽會より齒科參考品の製作を囑託され感謝狀を受く。

大正四年 三月齒科醫師法改正期成同盟會を組織し、齒科醫師法改正に努力せし功に仍り、日本聯合齒科醫師會より金牌を受く。十一月、賞勳局よ

り大禮記念章を受く。九月齒科教育及口腔衛生事業視察の爲渡米す。

大正五年 六月、米國メリーランド大學より、ドクトル・オブ・サイエンスの學位を受く。

大正七年 東京齒科醫師會より多年同會の評議員たりし功に對し、感謝狀及び文庫を受く。

大正八年 十月、日本齒學會名譽會長に推薦せらる。十一月、財團法人日本齒科醫學專門學校を設立し、その理事長に就任す。十二月成田鐵道株式會社より、關東鐵道創立の功に對し、金貳百圓也及び純銀製煙草入一個を贈らる。

大正九年 七月日本齒科學會より多年功績に對し銀杯と感謝狀を贈らる。同日本齒科醫學學校より創立以來の功勞に對し銀杯並に感謝狀を贈らる。十一月、天皇、皇后陛下より赤坂離宮に於ける觀菊御宴に招待せられ參列の榮に浴す。

大正十一年 四月第六回日本醫學會十六分科會の

名譽會長に推薦せらる。同月天皇皇后兩陛下より新宿御苑に於ける觀櫻會に招待せられ、參列の榮に浴す。十月、財團法人日本齒科醫學專門學校より勤續十五年表彰記念時計一個を贈與せらる。

大正十三年 二月十二日齒科醫育の功勞に依り勳六等に叙せられ瑞寶章を賜はる。五月五日、國法人大日本齒科醫學會より、名譽會員に推薦せらる。

大正十四年 四月十三日 天皇皇后陛下より新宿御苑に於ける觀櫻會に招待せられ參列の榮に浴す

大正十五年 四月第七回日本醫學會二十三分科名譽會長に推薦せらる。

昭和二年 二月七日大正天皇御大葬に當り新宿御苑内葬場殿帳會に於て參列の榮に浴す。

昭和三年 四月十日天皇、皇后兩陛下より新宿御苑に於ける觀櫻會に招待せられ參列の榮に浴す。

十一月十日、天皇陛下御即位式に參列す。十一月賞勳局より御大典記念章を賜はる。

十月二十五日、母校庭に建設せられたる壽像除幕式舉行せられ、その溫順は、母校創立者として永遠に記念せらる。

昭和四年 十二月日本論科學會雜誌主幹となる。

昭和六年 八月二日より開催の國際齒科醫學大會

へ、日本政府代表、日本齒科學會代表として出席、講演す。又同會に於て國際齒科聯盟委員に任ぜらる。歸途歐洲各國、北米合衆國の齒科醫學並に口腔衛生狀態を視察の上、十一月歸朝す。

昭和九年 七月一日、新附屬醫院竣工祝賀式を舉行す。

昭和十一年 七月四日母校創立三十周年祝賀式と共に古稀壽筵開催の豫定。

挿入寫眞に就いて

中原先生の所藏の青年時代迄の寫眞は、かの關東大震災の爲め烏有に歸したので本書挿入の寫眞中、若き頃の先生に關する寫眞は、各方面より蒐集して、やうやく間に合はせた次第である